日本心理学会第85回大会公募シンポジウム（C000553）
宗教心理学的研究の展開（18）
宗教，スピリチュアリティを追究するための「新たな連携・協働」の試み

# 超高齢社会において宗教心理学が取り組むことのできる新たな連携と協働

## －老年学・老年心理学から－

鈴鹿医療科学大学　　大　橋　　明

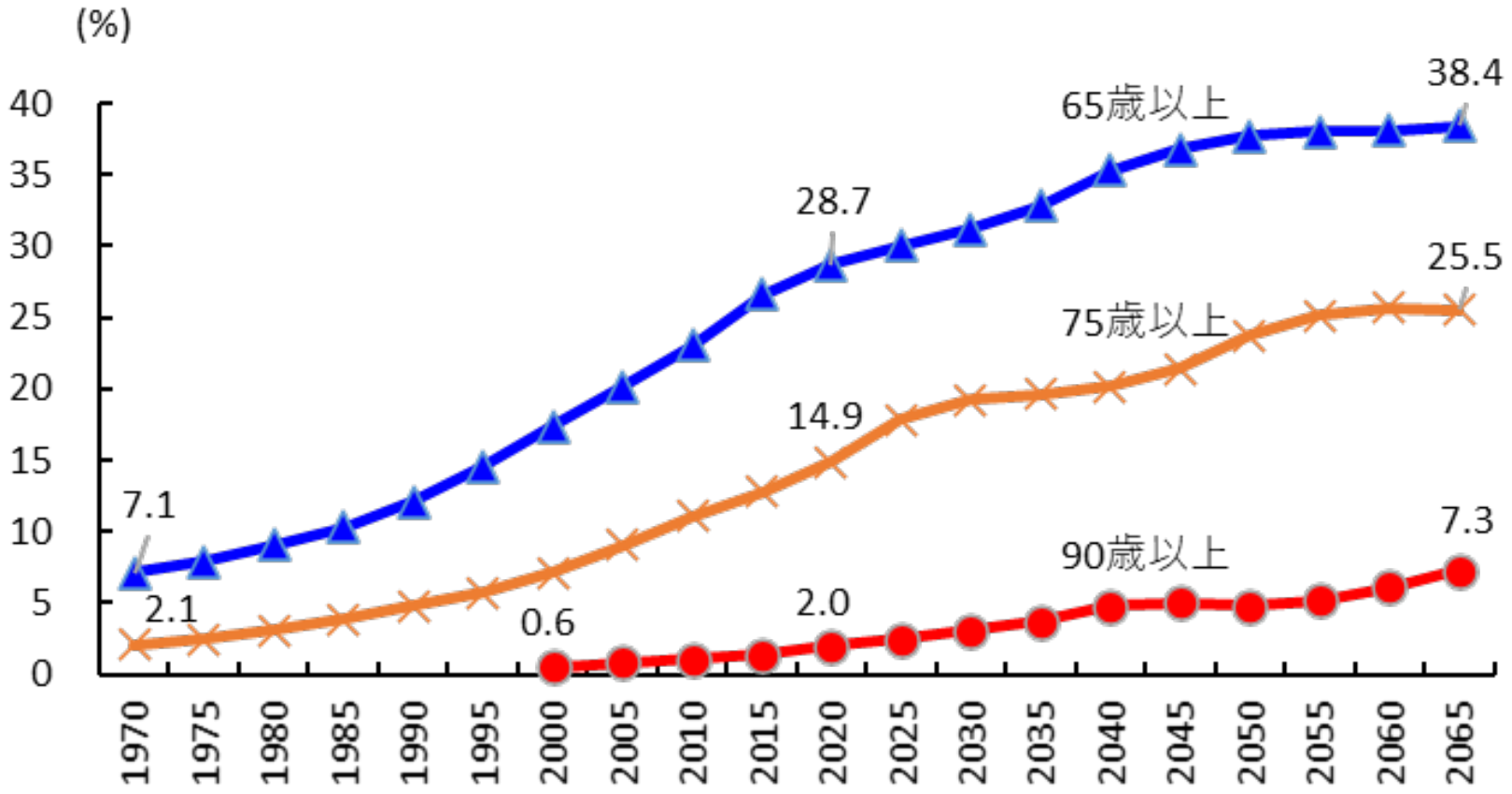
# 以降の展開

1. 超高齢社会といわれる日本の現状

2. 高齢者を対象とした宗教性・スピリチュアリティに関する実証的研究の概観

3. 「概念」「実証」「実践」で新たな連携・協働を行うために必要だと思われること

# 1. 超高齢社会といわれる日本の現状




全人口に占める高齢者の割合の推移

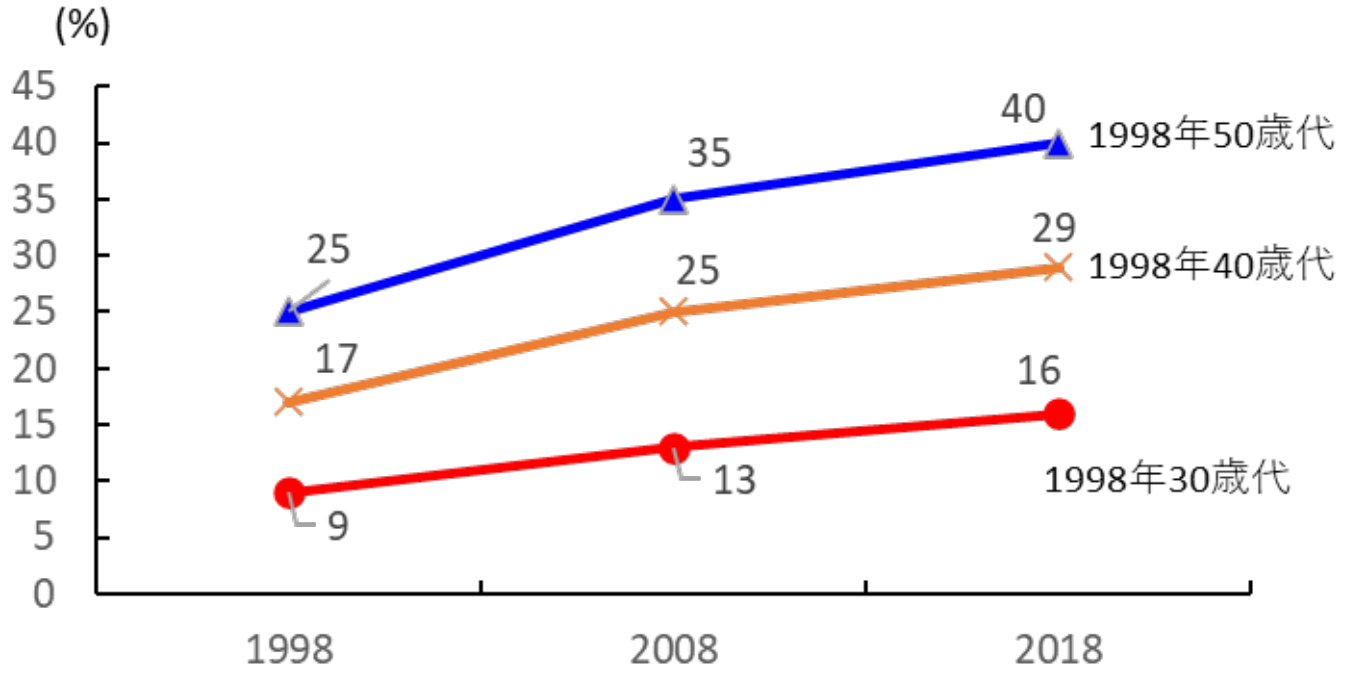
100歳以上の人口

| | |
|---|---|
| 1963年 | 153名 |
| 1970年 | 331名 |
| 1980年 | 968名 |
| 1990年 | 3,298名 |
| 2000年 | 13,036名 |
| 2010年 | 44,449名 |
| 2020年 | 80,450名 |
| 2030年 | 192,000名（予測） |
| 2040年 | 309,000名（予測） |
| 2050年 | 532,000名（予測） |
| 2060年 | 480,000名（予測） |

2015年までは国勢調査、2020年は総務省人口推計、2025年以降は国立社会保障・人口問題研究所のデータに基づく
国立社会保障・人口問題研究所　http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp29_ReportALL.pdf

# 社会でも宗教的なものに対して関心が向けられるように

- 西（2009）
  - 1998年以降、仏教への信仰や親しみが増した
- 小林（2019）
  - 「自然に宿る神」を理解できるとする者が7割
  - 年齢を重ねるに従って、仏壇を毎日拝むようになっている




仏壇を拝む頻度を毎日とする人の年次変化

西（2019）より大橋作成


西久美子 (2009).放送研究と調査, 59(5), 66-81.
小林利行 (2019).放送研究と調査, 69(4), 52-72.

# 2. 高齢者を対象とした宗教性・スピリチュアリティに関する実証的研究の概観

- 増井他（2010, 2013）
  - 「老年的超越」という精神的健康の維持に関する方略の検討
  - 「ありがたさ・おかげの認識」「宗教的もしくはスピリチュアルな態度」という特徴が確認された

- 中川他（2011）
  - 超高齢者8名への面接
  - 死者や神仏など、可視化されない存在への親和性が語られた

老年的超越における宗教性・スピリチュアリティの内容

| カテゴリー | 内容 |
|---|---|
| ありがたさ・おかげの認識 | 自己の存在が他者により支えられていることを認識することにより、他者への感謝の念が強まる<br>・先人（過去の人々）のおかげでいまの自分がある |
| 宗教的もしくはスピリチュアルな態度 | 神仏の存在や死後の世界、生かされている感じなど、宗教的またはスピリチュアルな内容を認識する<br>・神様や仏様のような人智を超えた存在があると思う<br>・ご先祖様との繋がりを強く感じる |

増井ら（2010, 2013）より大橋作成

増井幸恵他 (2010). 老年社会科学, 32, 33-47.
増井幸恵他 (2013). 老年社会科学, 35, 49-59.
中川威他（2011）. 老年社会科学, 32, 422-433.

- Ronnenberg et al.（2016）
  - 高齢者の追跡調査（2006年と2008年）
  - 2006年に抑うつ状態であった1,992名と、抑うつ状態でなかった5,740名（平均年齢68.12歳）

  - 2006年に抑うつ状態であった高齢者
    - 抑うつ状態が軽快：1人での祈り（private prayer）が多い者（OR: 0.93）、健康状態良好（OR: 0.43）
    - 抑うつ状態を維持：ユダヤ教信者（OR: 2.05）、心臓発作などの病気（OR: 1.57）

  - 2006年に抑うつ状態でなかった高齢者
    - 健康を維持　：礼拝に高頻度に参加する者（OR: 0.75）、収入が多い（OR: 0.69）
    - 抑うつ状態へ：健康状態が悪い者（OR: 2.69）、独居者（OR: 1.35）

*＊他にも関連要因あり*

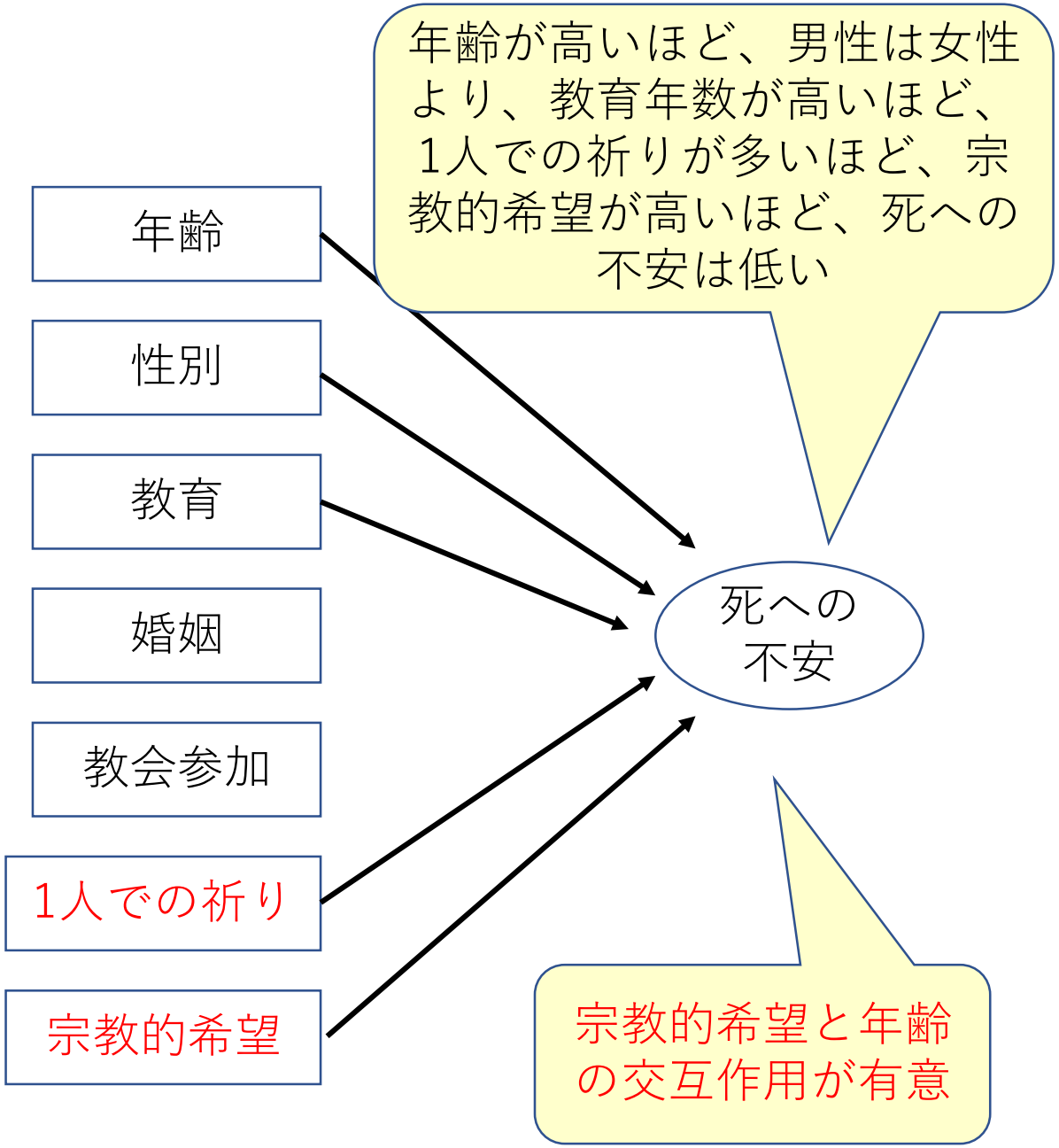
Ronnenberg, C. R. et al. (2016). The Gerontologist, 56, 421-431.

- Krause et al. (2018)
  - 2,783名（18歳以上）を対象
  - 「死への不安」に対して、宗教的希望は緩衝剤となるか
    - 加齢とともに、死への不安に対する「宗教的希望」の緩衝効果が大きくなる

各年代における宗教的希望と死への不安の関連

| | |
|---|---|
| 30歳代 | -.048 |
| 40歳代 | -.089 *** |
| 50歳代 | -.130 *** |
| 60歳代 | -.171 *** |
| 70歳代 | -.212 *** |
| 80歳代 | -.253 *** |

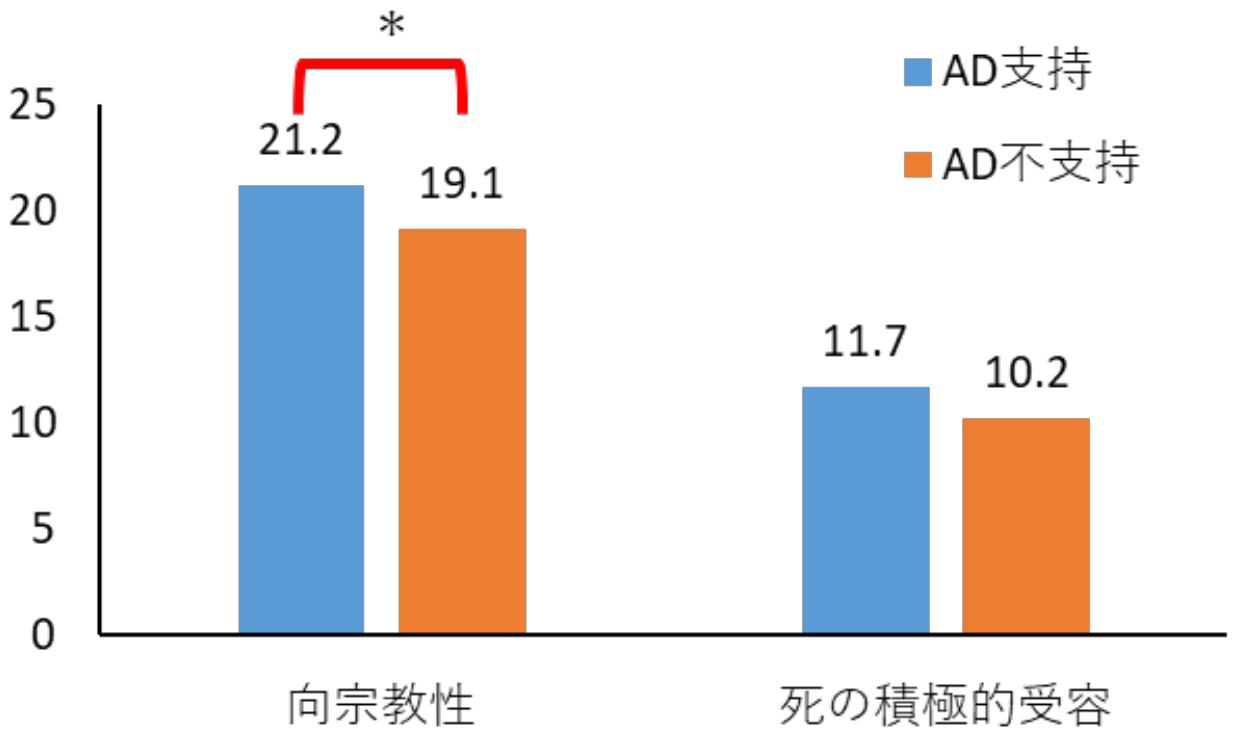
****: p<.001*　　Krause et al.(2018) より大橋作成




Krause, N. et al. (2018). Journals of Gerontology, B, 73, 696-703.

- 松井他（2004）
  - 在宅高齢者313名を対象
  - 向宗教性が高い高齢者ほど、アドバンスディレクティブ（AD）に賛同

- 横尾他（2020）
  - 146名を対象
  - 地域在住の要介護認定高齢者のスピリチュアリティは精神的健康に影響するか
  - 「深心」が高い者ほど精神的に健康




宗教・死に対する態度とAD支持・不支持の関連

*: p<.05

松井他（2004）より大橋作成

松井美帆他 (2004). 病院管理, 41(2), 137-145.
横尾誠一他 (2020). ホスピスケアと在宅ケア, 28, 13-19.

## 3. 高齢者研究において「概念」「実証」「実践」で新たな連携・協働を行うために必要だと思われること

**【概念→実証→実践】**

- 概念を実証（尺度等）に落とし込む場合に、「欠落」「理論とのズレ」に注意する
  - 横尾他（2020）：スピリチュアリティを「意欲」「深心」「意味感」「自覚」「価値観」で捉える（比嘉, 2006）

- 実証の結果を現場に援用できるように工夫する（共通言語で表現するなど）
  - 「1人での祈り（private prayer）」（Ronnenberg et al., 2016）とは

比嘉勇人 (2006). 医学のあゆみ, 216, 163-167.

## 【実践→実証→概念】

- 日々現場で感じていること・見られることも重視する
  - 宗教・スピリチュアリティに関わる事象を丹念に集める
    - 地域住民（高齢者）が地蔵を拝むこと（NHK, 2021）の意味は？
    - 「赦し」は本当に幸福なこと（Dezutter et al., 2016）か？

- 実証の結果を概念とすりあわせる
  - ある側面について、1つの実証だけではなく多々繰り返していく
    - 研究結果が概念・思想に「当てはまらない」ことも出てくる可能性

各領域の専門家による適切なディスカッション
各領域を結ぶ適切な仲立ち（通訳）の存在

https://www.nhk.jp/p/72hours/ts/W3W8WRN8M3/episode/te/P1WZ9KZRWQ/
Dezutter, J. et al. (2016). Journals of Gerontology B, 71, 786-797.